

近代における禅僧の出版活動と曹洞宗大学

松尾 隆宏

1. はじめに「本資料」の説明

本稿では、令和元（2019）年度に受贈した曹洞宗陽田寺（秋田県河辺町）旧蔵資料「飯塚禅應・哲英師関係資料」（以下、「本資料」と略称する）について、報告と考察を行なう。

「本資料」は、陽田寺元住職の飯塚哲英が大正時代から昭和戦前期に行なっていた出版活動による活版印刷の紙型と飯塚哲英ほか父の禅應らが所蔵されていた陽田寺旧蔵の書籍類に分けられる。

飯塚哲英は、明治43（1910）年に本学の前身である曹洞宗大学へ入学し、大正4（1915）年に卒業、同6年に出版社、中央仏教社を立ち上げた。同13年10月創刊の月刊雑誌『大乘禅』の誕生には曹洞宗大学仏教学部元教授であった原田祖岳も深く関わっている。原田自身も毎号のように『大乘禅』に寄稿をし、中央仏教社から書籍として刊行もされている（「本資料」目録表1-4～7）⁽¹⁾。

さて本稿は、「本資料」のうち紙型の来歴と飯塚哲英と本学の関わりについて、若干の考察を加えていくものである。

「本資料」紙型は大正から昭和戦前期にかけての出版活動を語る資料であるだけでなく、本学の大学史や近代における仏教、禅宗の出版活動を語る上で、非常に重要な資料であると言える。

まず前提として、紙型とはどのようなものか『大日本大百科全書』には以下の説明が書かれている。「活字組版など凸版の複製版をつくるときに使う厚紙の母型。紙型原紙は、貼り合わせ、あるいは抄き合わせてつくった厚紙で、版の模様を忠実に再現するために必要な塑性、平滑性、耐熱性、強度を備えている。（中略）紙型をつくるには、複製しようとする版面上に紙型原紙を置き、紙型取り機を用い、強圧加熱してつくる。（中略）この紙型に溶融した鉛合金を流し込んで鉛版、すなわち複製版をつくる。（中略）紙型は軽く、かさばらないので、保存版として使われる。」⁽²⁾とある。

すなわち、一度印刷した活版の鋳型は、重く、また嵩張るので、保存には向かなかった。一方で、出版物が再版となったときに、一から鋳型を組み直すのでは、時間と労力を伴う。紙型は出版物の再版の迅速化と共に保存場所の省スペース化を可能にする鋳型の控えであり、活版印刷が主流の時代において紙型は重要な役割を果たしていたと言える。

しかし、紙型については、活版の控えという性質上、従来よりあまり注目されてこなかった。本稿では、「本資料」紙型の来歴と本学との関わりについて考察を試みる。本稿の試みが、紙型を博物館資料として活用する契機の一つとなれば幸いである。



飯塚哲英の写真
（『大乘禅』第31巻第4号、
本学図書館蔵）



『大乘禅』創刊号（本学図書館蔵）

2. 「本資料」紙型と空襲

まず「本資料」紙型の来歴について、『大乘禅』誌面上から探っていく。『大乘禅』第22巻2号⁽³⁾の社告「本社の災禍と疎開」というタイトルで以下の記事が書かれている。⁽⁴⁾

「敵襲により東京牛込区矢来町一五四番地の本社は全焼、出版物、印刷用紙、揮毫類、蔵書、道具等全部消失、また印刷所の災害にて「大乘禅」二、三、四、五号原稿悉く烏有に帰し、結局東京に於ける発行が不可能になりましたので臨機の所置として小生の自坊、秋田県河邊郡和田町陽田寺に発行所を移し、甚だ不備ながらこゝに合併号を発行致しました。八月号よりは更に一段と内容の充実を計り、決戦下の禅宗

代表誌としての本面目の發揮につとめたく、諸準備を進め居りますから、倍旧の御依援をお願い申し上げます。（中略）

昭和二十年七月

秋田県河邊郡和田町陽田寺内

中央仏教社

主幹 飯塚哲英

とあり、同号の編集後記⁽⁵⁾には、

「社告に申し述べました通り空襲の災害に罹り本社は全焼しましたが、読者台帳、出版物の紙型は烏有を免れましたことは不幸中の幸いでした。（中略）書籍は一際焼失しましたのでその方面の御注文には当分応じかねます。然し紙型がありますから何れ再版の期はあるものと信じます。」

と述べられている。昭和20（1945）年という太平洋戦争末期に、東京牛込区矢来町（現東京都新宿区）に火災を伴うような被害があったのは、同年3月10日の空襲によるものと推測できる⁽⁶⁾。これはいわゆる東京大空襲であり、社告によると中央仏教社は全焼し、出版物や道具類も全て焼けてしまったようである。哲英は更なる空襲の激化を憂いてか自坊である秋田県の陽田寺への疎開を余儀なくされた。しかしながら、編集後記にあるように「読者台帳と出版物の紙型は烏有を免れましたことは不幸中の幸い」とあり、「本資料」紙型は、東京大空襲による中央仏教社本社の火災から奇跡的に免れて現在まで伝わってきた資料といえる。

「本資料」紙型は、出版物の全ページが揃っているものもあれば、数ページしかないものまで、残存状況が多様であり、空襲により燃えた紙型もあったと思われる。その中で、奇跡的に被災を免れた紙型は、「本資料」として現代まで残ってきたのである。

編集後記に「紙型がありますから何れ再版の期はあるものと信じます。」とあるように哲英は、本社が全焼しながらも「本資料」紙型と共に出版物の再版に前向きな姿勢を示している。

「本資料」紙型から再版されたかどうかについては、定かではないが、被害を免れた「本資料」紙型は、哲英の心の支えとなったに違いないだろう。

3. 飯塚哲英と曹洞宗大学

本章では「本資料」紙型に関連して、飯塚哲英及び中央仏教社と曹洞宗大学（現駒澤大学）の関わりを述べていく。

(1) 飯塚哲英について

まず、飯塚哲英の人物像について概略を示したい。飯塚哲英の追悼号である『大乘禅』第31巻第4号には、その略歴が示されているため、以下に、引用する⁽⁷⁾。

「明治廿三年三月廿七日秋田県米内沢町浄福寺に生れ」「同卅六年三月十八日種平村平尾鳥松連寺住職飯塚禅応（実父）に就て得度」「四月十三才の時和田高等小学校三学年に編入、往復五里の山道を通学、冬だけ陽田寺に滞在す」「明治卅八年六月十五才の時「小天地」を出版、夢袋と号す」「明治四十年三月廿一日兄全亮師他界」「明治四十三年九月曹洞宗大学に入学」「大正四年七日（ママ）同校卒業、大正五年十二月一日一年生志願兵として秋田歩兵第十七総隊第一中隊に入営」「不幸病痾に冒され五月二日疾病除隊後築地に入院加養四ヵ月」「大正六年九月中央仏教社創立、十二月志を同じくする実弟信亮氏に死別、翌年十二月には脚気症突発のため入院快方に向かいしが翌年またも再発入院す、大正七年四月より施本発刊」「大正十三年十月大乘禅創刊す」「昭和十四年十二月十九日秋田陽田寺住職同十六年五月十日普山式修行、十七年三月十二日父八十四才で死去」「昭和十九年四月中央仏教大乗禅に合併す、廿年四月戦災のため秋田に移住す。廿三年春頃より健康すぐれず、廿八年十一月三十日死去す」

明治23（1890）年に秋田県の米内沢町（現森吉町）に生まれた哲英は、12歳で、父禅應の元で得度し、15歳で夢袋と号した。夢袋という号は、金の鳥社においての発行（目録10、11）や雑誌での編集後記などの主に著述をする際に使用されていた⁽⁸⁾。逆に編集者としては、飯塚哲英（目録表1を含む中央仏教社、金の鳥社刊行物）という名義の使い分けがなされていた。明治43年に曹洞宗大学に入学し、大正4（1915）年に卒業した。翌年、秋田歩兵第十七総隊第一中隊に志願兵として入隊したが、病気により除隊された。大正6年になり、中央仏教社を創立し、大正13年になり禅雑誌の『大乘禅』は創刊された。

その後、『大乘禅』を始めとする雑誌や「本資料」紙型などの書籍を発行してきた。しかし、先述したように東京大空襲により、中央仏教社は全焼してしまう。そのため自坊の秋田陽田寺に戻り、出版事業を続けた。

また、「不幸病痾に冒され五月二日疾病除隊後築地に入院加養四カ月」「翌年十二月には脚気症突発のため入院快方に向かいしが翌年またも再発入院す」などとあり、病気がちであったことがわかる。追悼号には、その他病歴の記載が事細かに記されている⁽⁹⁾。昭和23（1948）年になると特に健康が優れなくなったようで、長らく闘病を続けていたが、同28年に示寂した。闘病の記録については、『大乘禅』の編集後記によく見られた⁽¹⁰⁾。

(2) 飯塚哲英と原田祖岳

中央仏教社の代表的な雑誌である『大乘禅』の創刊には、曹洞宗大学元教授の原田祖岳が深く関わっていたことが知られる。先述した、飯塚哲英追悼号である『大乘禅』第31巻第4号には、原田祖岳が「大乘禅創刊の追憶」と題して、以下のよう

「飯塚君は小衲の駒大教授時代の学生であった。卒業後、中央仏教社を興して文筆
伝道に活躍していたので、当時禅三派を見渡した処、禅を鼓吹する気の利いた雑誌
がないから、一つ君が初めたらどうかというと、やつてもよいが金がない、当時の
金で千円資金がほしいとのことであつた。これを小浜の習田勤吾郎先生（医者）に
お話しすると、自分が出てやろうということで、そのお陰で「大乘禅」の創刊号
は出たわけです。そこで小衲もす毎号寄稿する約束で、まづ修証義の講話を書き初
め、五ヶ年かゝつて完了誌ひきつゞき仏教体観を書きました。二冊とも後に飯塚君
の力で単行本になり「修証義講話」は三版にもなつたが、昨年改訂版にして小衲の
手元から出した次第です。

「大乘禅」に執筆していた頃は発心寺の住職時代だつたから、寺の用事も多いまた地方へ方々講話に出歩いていたので随分忙しく、毎号電報で二三回は催促され、すると徹夜で書いたもので、なかゝ辛かつた。しかし今から思うとよくやつたものだと思いますあ（ママ）。

とにかく「大乘禅」が出来て、追い立てられるように書かされたそのお陰で、小衲もあんな尤大な著述が出来たのだと、この点飯塚君に心から感謝しています。」

とあるように原田祖岳が駒大（曹洞宗大学）教授時代に教え子であった飯塚哲英に『大乘禅』の創刊を勧めたことが確認できる。創刊以来、毎号のように原田祖岳は『大乘禅』に寄稿している。また、『大乘禅』の記事や『中央仏教』の記事を元に中央仏教社から書籍化がなされて出版したものもあった。一部の紙型が「本資料」として寄贈されている（目録2～7）。目録6の『修証義講話』は原田も述べているように3版に、目録7の『胎教の仕方』に至っては、大正13年8月22日の発刊から、20版以上にも及ぶベストセラーともいべき著作となった。



原田祖岳の写真（当館蔵）



胎教の仕方（目録7、当館蔵）

(3) 中央仏教社と曹洞宗正信論争

曹洞宗や本学に関わる問題として、曹洞宗正信論争というものがある。

これは、昭和3年に起こった、本学（当時）の学長忽滑谷快天と元曹洞宗大学教授の原田祖岳を中心とした宗論である。昭和3年に忽滑谷が曹洞教会の伝導機関誌『星華』創刊号⁽¹²⁾に発表した、「正信」と題する巻頭論文に対し、原田が『公正』⁽¹³⁾紙上で「須く獅虫を駆除すべし」と痛烈な批判を掲載したことに始まる。これを契機として、双方の門下、中間派の間で宗論が行なわれた⁽¹⁴⁾。

中央仏教社発行の『中央仏教』や『大乘禅』誌上においても、論文が掲載され宗論が展開されていった。

『大乘禅』創刊の経緯を見ると、原田祖岳と密接な関係にあったとわかる哲英であるが、『中央仏教』『大乘禅』には忽滑谷自身や忽滑谷派の論文もそれなりに寄せられている。

これについて興味深い記事があったので紹介したい。『大乘禅』第31巻第4号飯塚哲英の追悼号に、井上義光⁽¹⁵⁾は以下の記事を寄せている。

「(前略) 若い勢もあつただろう、人をして論争させるように仕組で誌上を賑わす手腕はうまいものであつた、当時の滑忽谷（ママ）前学長と原田祖岳老師と正信問題は随分な論戦であつた（後略）」

と述べている。「人をして論争させるように仕組」ん「で誌上を賑わす」というように、飯塚哲英は両派閥を問わずに論文を寄稿させ曹洞宗正信論争に関わった。単に原田に同調するのではなく、両者の立場から『大乘禅』や『中央仏教』誌上で、論争をさせたものと思われる。

飯塚哲英は、曹洞宗正信論争を単にひとつの宗論としてではなく、教学が発展するための宗論としてこの問題を捉え、両派閥側から誌上での寄稿を集めていたと思われる。

5. おわりに

本稿では、「本資料」紙型及び関連する飯塚哲英と本学についての考察を行なってきた。飯塚哲英は出版事業を通じて禅宗及び仏教の教学発展のために尽くした。哲英が果たした役割は非常に大きなものがある。

哲英は前述したように、昭和28年に亡くなるが、『大乘禅』の編集は、生前より哲英と共に編集作業に携わっていた子息の孝慈氏に受け継がれ、以降平成20（2008）年の通巻第996号まで確認できる。書籍についても同様に発行されている。飯塚哲英の禅と仏教の伝道、普及という思いは長く受け継がれていったのである。

今後、「本資料」や『大乘禅』などを利用して、飯塚哲英や近代の出版事業、近代の仏教、禅宗の展開、そのほか新たな視点からも「本資料」が利用され研究が進展していくことを期待して、本稿を終わらせることにしたい。

【参考文献】

『大乘禅』創刊号～996号（中央仏教社、1924～2008年）
武井謙吾「近代禅雑誌の展開」（『駒澤大学大学院仏教学研究年報』第53号、2020年）

註

- (1) 目録のほか『座禅の仕方』（中央仏教社、1926年）、『仏教大観』（中央仏教社、1937年）など
- (2) 『大日本大百科全書』（小学館、1984年）
- (3) 『大乘禅』第22巻第2号（中央仏教社、1945年）
- (4) なお記事の引用について、旧字で書かれている部分もあるが新字に改めている。以下、引用する際も同じである。
- (5) 註3
- (6) 東京都編『東京都戦災誌』（東京都、1953年）
- (7) 『大乘禅』第31巻第4号（中央仏教社、1954年）
- (8) 奥付やその他出版物に見える。
- (9) 註7
- (10) 「五月号は編者の具合が悪く、編集が遅れて仕舞いました」（『大乘禅』第28巻5号、1951年）、「小康を保ちつゝあつた主幹の病状は去る二十一日早暁、突如として右腎臓部の激痛を起し、血尿等で外科医の手術に及ぶのではないかと憂慮され」（『大乘禅』第

30巻5号、1953年）、「五月末日またも突然左半身の不随、呼吸の不正、手足の痛み等があらわれ」（『大乘禪』第30巻第7号、1953年）など

- (11) 註7
- (12) 『星華』創刊号（曹洞教会、1928年）
- (13) 『公正』第39号、1928年
- (14) 曹洞宗正信論争についての解説は、駒沢大学八十年史編纂委員会編『駒沢大学八〇年史』（同編纂委員会、1962年）、竹林史博編『曹洞宗正信論争（全）』（青山社、2004年）などに詳しい。
- (15) 長命寺、勝運寺住職。昭和16年少林窟飯田樞隠に随時。同33年、広島県竹原市に少林窟道場開単。註14〔竹林2004〕

（まつお たかひろ 駒沢大学大学院人文科学研究科歴史学専攻修士課程）